連載講座 第27回

酒を新しくするために・蒲生氏郷

作家　童門冬二

大名の異動と住民意識

豊臣秀吉は“大名の鉢植え”といって、大名の大規模な人事異動をおこなった。国内各地域の領主（大名）を鉢に植えた植物とみなすのだ。実際には鉢よりも大きい地域に根を生やした名族を引きぬいた。定着した権威を認めないのだ。すべての権限が天下人である自分に帰一しないと気がすまない。

当時、大名の異動にともなって共に移動できるのは家臣（武士）と商人（その気のある者）だけだ。人口の大層を占める農民はそのまま固定される。移住はゆるされない。だから大名の異動の多い地域の農民は、権力者をみる目が肥えてくる。黙々と仕事はするが新しい領主をみる目はクールだ。必ず歴代の領主を比較する。善政をおこなった領主をひそかに慕う。

大名の中でもこういう農民心理をしって気にする神経のこまかい人物もいる。何といっても農民は年貢（税）によって領主の経営を支える重要な存在だからだ。悪い言葉を使えばひとりひとりがそのまま税源なのである。だからこそ身分制でも武士のつぎにランクしている。これは農民の人権を尊重したからではない。税源としての尊重だ。

こういう状況なので異動させられた大名は、新任地の実態調査で現地の住民の意識調査に力点をおく。自分の施政への協力度のモラールサーベイ（やる気調査）だ。とくにインフラや災害対策などの「協同心」を重んずる作業には欠くことができない。

近江（滋賀県）日野城主だった蒲生氏郷は、突然秀吉によって伊勢（三重県）の四五百（よいお）に転勤を命ぜられた。代々日野に勢威を張ってきたので引抜かれ、移植されたのだ。氏郷は秀吉の旧主織田信長の娘を妻にしていたので、何かにつけて気になる。そこで都に近い近江から遠ざけたのだ。その代り知行（石高）は倍増した。

「収入を増やして本社から遠ざける」という“敬遠人事”だ。しかし氏郷はこれに従った。家臣団とかなりの数の商人群が供をした。信長から楽市楽座をみせられ、これからの大名は領地経営と、ソロバン勘定の大切さを教えられた氏郷は、日野で近江商人の育成保護にも力を注いでいたからだ。商人たちも氏郷を徳とし慕っていた。

四五百に入国した氏郷はまず現地の実態把握につとめた。キャッチした実情はつぎのようなものであった。

- 住民の大層を占める農民は前領主を慕い、新領主（氏郷）には冷ややかだ。お手並拝見という迎え方だ。
- かなりの数の商人がのこっている。いままで開拓したおとくいさんに執着している。新参の近江（日野）商人に奪われてたまるか、という敵愾心をもっている。

・共に伊勢人意識がつよい。それは誇りと自信によって成り立っている。

（厄介だな）氏郷は腕をくんだ。（どうするか）懸念に頭を働らかせた。

新旧意識の発展的解消

突然氏郷の頭に閃いたものがある。古語だ「新しい酒は新しい革（皮）袋に盛る」

という言葉だ。そうだ、と氏郷は自分のひざを叩いた。「これでいこう」とひとりでうなずいた。

氏郷は四五百の地に新しい城を築いた。城下町も造りインフラもおこなった。住民の住区も割りあて、モノづくりや職人は職業別にした。この時、旧住民と新住民を一緒にした。

「混乱が起っております」

と部下が報告にきた。「混乱とは」とききかえすと「旧住民と新住民の争いです」という。氏郷にすれば想定内のことだ。というより争いを予定して一緒の土地に住まわせたのだ。

氏郷は旧住民と新住民の代表者を城に呼んだ。大広間に座らせた。家臣の代表も同席させた。こう告げた。

「四五百の地名を改め松坂（まつざか）（阪は明治以後）と改める」。座にザワメキが起った。まつざか、まつざかと草を渡る風のように私語がつづいた。その収まるのを待って氏郷は話をつづけた。

「したがってきょうからは、もう四五百も日野も存在しない。あるのは松坂だけである。商人も四五百商人や伊勢商人もいなくなる。日野商人も近江商人もいなくなる。いるのは松坂商人だけである。武士もすべて松坂城の武士であって日野城の武士ではない。よいな？」

そして自分の話をわかりやすくするために“新しい酒は新しい革袋に盛る”という古諺（げん）を例にあげた。

「今回は松坂という新しい革袋を先につくった。おまえたちは伊勢四五百と近江日野の古い酒だ。共に松坂という新しい革袋の中に投げこむ。その中で協同共生の精神を生め」

とさとした。四五百だ伊勢だ、日野だ近江だ、といままでの考えにもとずく固定観念は捨てろということなのだ。古い先入観は松坂という新しい革袋の中で、共に発展的解消をしろということなのである。

この意識改革案は成功する。しばらく時間はかかったが、伊勢四五百も近江日野も消えた。ただ氏郷は伊勢という国名は重んじた。旧来の住民も新来の住民も、「伊勢松坂の民」として、新しい酒に変った。災害などの対応にも一致協力して努力した。

この方法は氏郷のつぎの転任地会津でもおこなわれる。氏郷は秀吉によってつぎは会津の黒川に移される。氏郷はここでも起った新旧住民の争いを、地名変更によって解決した。「若松」が新地名である。この時氏郷は日野の名産工芸品“日野椀”をもちこんで、現地化した。現在“会津塗り”とよばれている。